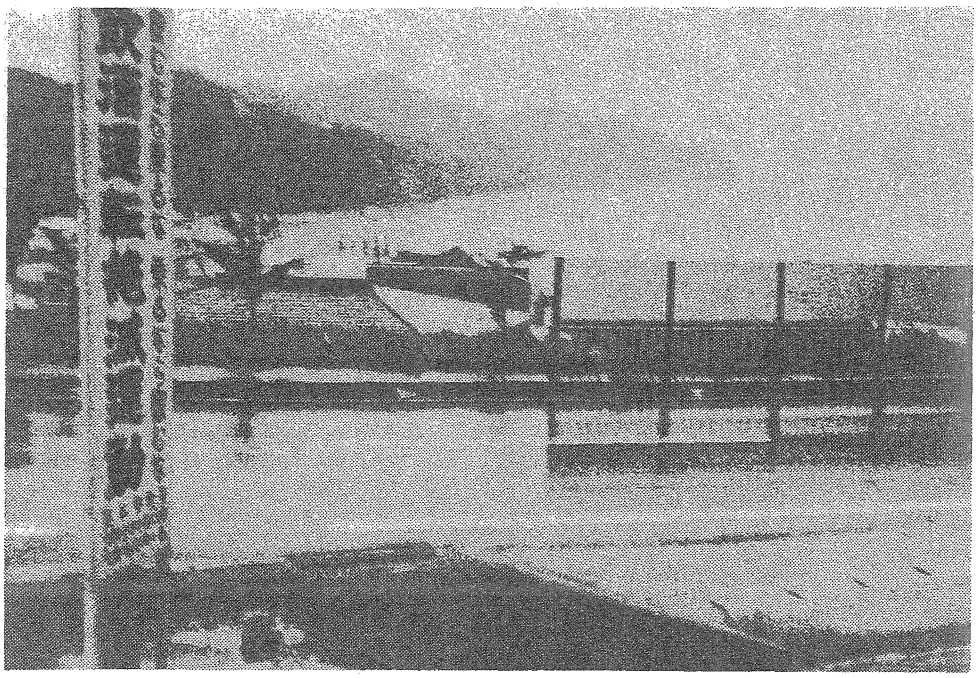
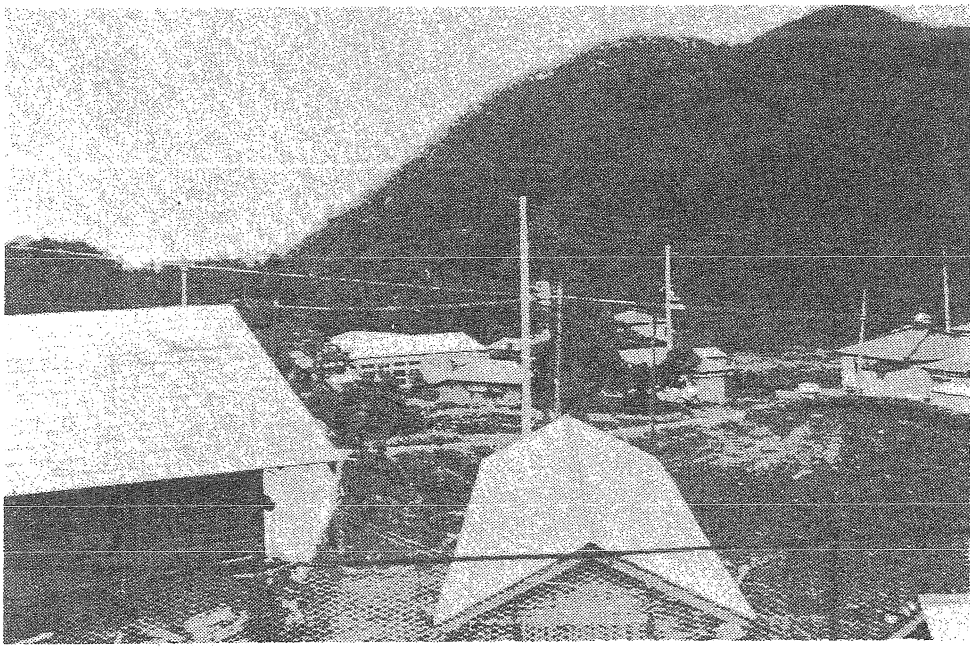
三陸沿岸に周期的に
襲来する此の津浪の
災害に対しては吾人
は周到なる予防避難
方法を講じ再びかか
る惨害を蒙らざる様
今に万全の策を立て
られんことを切望す。

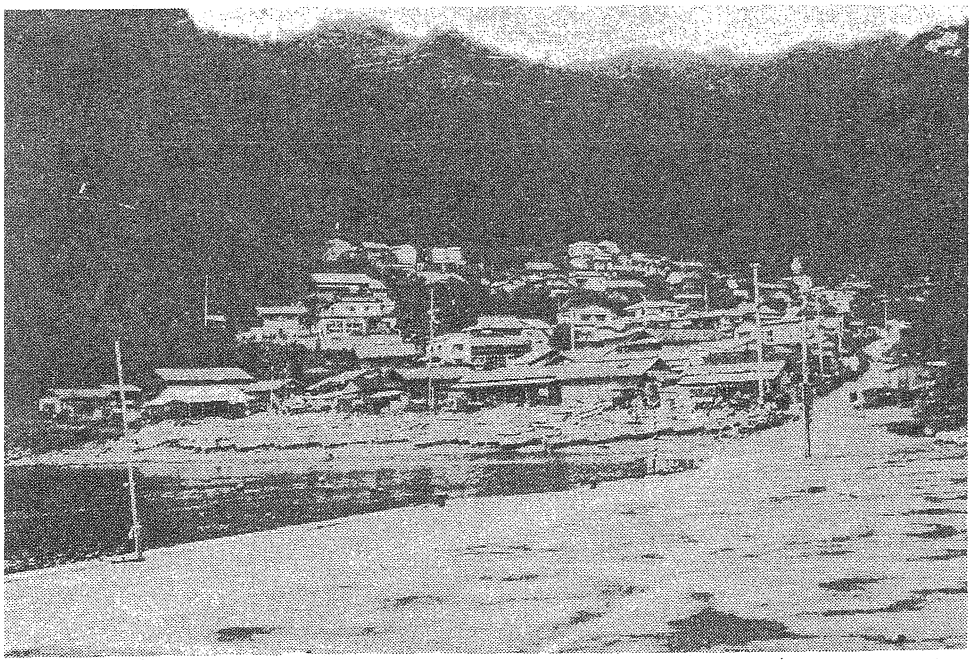
（本文より）



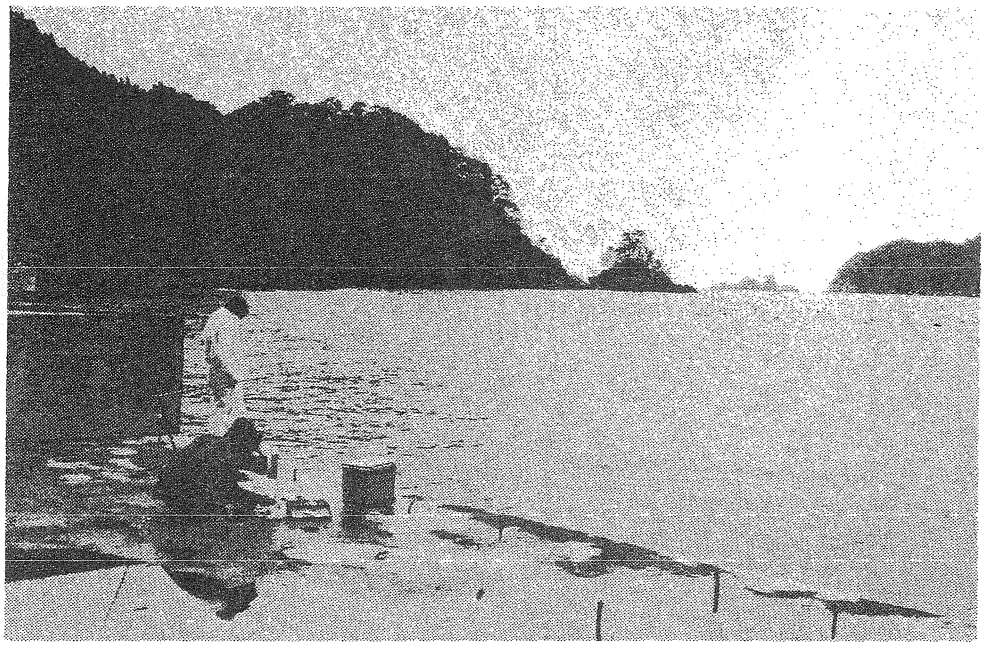
現在の小白浜港．上方右は唐丹湾の入口



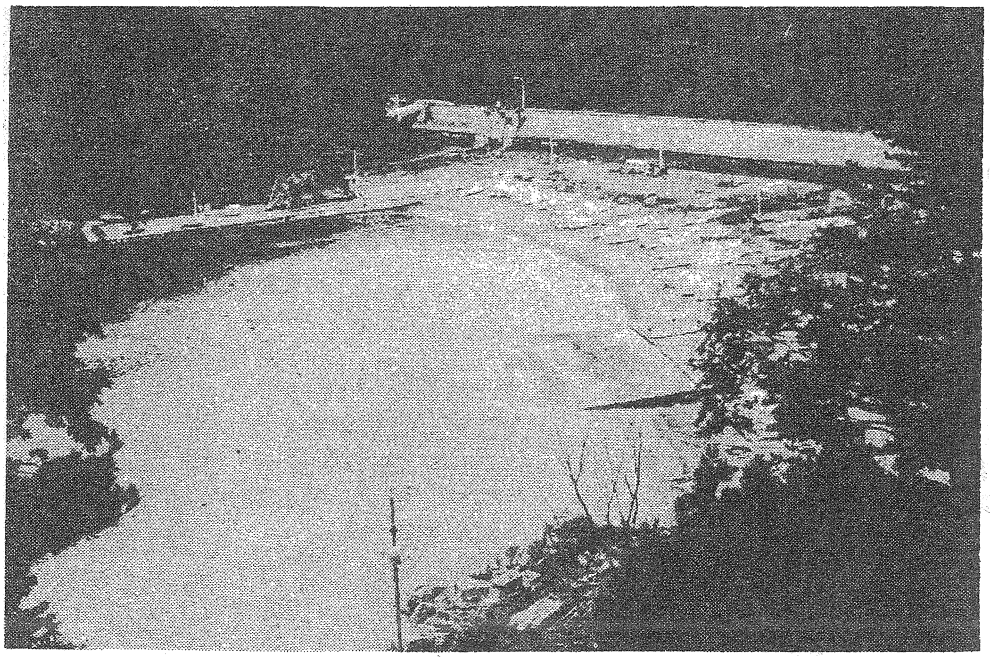
現在の本郷



現在の花露辺港



現在の花露辺港



現在の本郷

序

「災害は忘れた頃にやってくる」と言われますが、忘れかけている昭和八年の三陸大津波から五十年になる時、生々しい悲惨な体験と綿密な調査資料をもとに書き残した『津波の記録』を出版されますことは、誠に意義深く、心から敬意を表します。

この貴重な記録は、故佐々木源次郎先生の遺稿を中心に、当時の小白浜小学校の教職員や地元の有志関係者が記録したものを、子息の佐々木典夫先生（陸前高田市立横田中学校教諭）が世に出すものであります。

「津波の記録――昭和八年の三陸津波」は、津波の恐ろしさを記述しているだけではなく、災害から尊い人命と貴重な財産を守るための教訓を、先人の恐怖の体験と惨酷な苦しみのなかから、禍を転じて福となす様、後世のために防災対策まで考えたものであります。

尊い生命を奪われ五十回忌をむかえられる犠牲者の御霊に、心からの追悼となるとともに、宿命的な三陸沿岸住民にとって、津波が襲来したとしても、再び悲惨な体験を繰返さないための、貴重な資料として活用することがこの意義であると考えます。

さすが佐々木源次郎先生である。すばらしい記録を残してくれたものであると心から敬意を表し

ます。先生は、私の米崎小学校時代の恩師先生であり、太平洋戦争中の食糧事情を改善するため、日夜をわかたぬ努力を重ね、食糧増産のため率先垂範なされたことが思い出され、勤労の精神を教えてくれた恩人でもあります。また御子息であられる典夫先生は、日頃尊敬する先輩教師でありますので、序文を書かせていただきほんとうに恐縮するとともに、心から深く感謝しております。

拙いことばですが、この『津波の記録』を出版なされた意味が生きて働くことを祈念いたしまして序にかえます。

昭和五十七年八月

陸前高田市教育長　吉田正人

目次

序……5
津波を直感した人々……9
唐丹村役場の急報……11
皇室の御仁慈……14
津浪襲来と其の惨状……16
救護団の活動……21
罹災者と救療班の活動……27
湾内流失物の処置……30
慰問品の配給……32
死体捜索と始末……34
村内各種団体の活動……36

津浪災害予防……38
第一章　緒　説……38
第二章　海岸線・海底の状況と津浪……39
第三章　浪災予防法……41
葛西氏よりの手紙……43
あとがき……45

津波を直感した人々

平館幸蔵氏は、地震後三回海岸に警戒に出て、三回目の時東方の沖合に大音響と発光現象あり、不思議に思いてしばし海面を注視し居たるに、海の遠鳴りと共に俄に減水し始めたり。此れを見るや直ちに津浪と直感し、半鐘を乱打して全部落に警戒せんと、折柄海岸に立てる大見楼に上らんとせるに海の鳴り響き物凄くなりたるに打ち驚き其の侭ひた走りに走り、小池善兵衛氏宅前で津浪だと絶叫し、又走り乍ら佐藤亀松氏の前で叫び、自分の家に飛び入り一家を率いて避難せり。

附近の家々では、時ならぬ音響と海の遠鳴りに不安を抱き居りし折柄、幸蔵氏の津浪だーとの最初の一声にすわとばかりに騒然となり、右往左往に避難するに至れり。今生存せし人々の平館氏に対する感謝の念の切なるもの多し。

不幸、本郷（ほんごう）は三百二十五名の多数の死者を出せしは、返すがえすも残念にて思うて涙の今新たなるあり。

省みて本郷は、何故に斯くの如く多数の死亡者を出せしか、その原因を探るに、本郷には明治二十九年の津浪の遭遇者少なく、ために海岸に下りて警戒する者少なく、北村方面を除く外は大概平然として就床しあり、或は談笑しあり、津浪襲来間際に海岸の騒ぎに打ち驚き、或は海岸の家の破壊する音に驚き人々夢中に逃げ惑う者多く、常にこうした非常訓練に馴れざるため只高所高所と目差し、狭

校庭に避難した人々

隘なる箇所にのみ皆押寄せ、上り兼ね居る中に漲われたる者多く、最も避難に適せる県道伝いに走りし者の少なきは遺憾なり。何の因縁か此の晩ばかりは常とは異なり、余りにも消防其の他の人々は冷静なりし由なり。

然し乍ら比較的生存者多く、一家全部残りし者等の北村方面に多かりしは、避難所の良好は無論なるが、平館幸蔵氏の功績又顕著なるものあり。

片岸部落にては、岩沢長松氏は、地震後直ちに身仕度をなし片瀬川口にある海岸燈の下に来たりて海岸警戒中、東方沖合に一大音響を発したるに打ち驚き、片岸部落に向かって「津浪だ、津浪だ」と大音声を張り上げ、片岸部落の人々をして早く避難せしむるに至れり。

花露辺部落に於いては、海岸に在りし大瀧安五郎氏は海水の引け始めしを直感し、直ちに騒ぎ立て避難せしめ、高所にありては川畑辰三郎の妻ウメ氏は声の枯れる程海岸に向かって「津浪だ、津浪だ」と絶叫せりと。

荒川部落に於いては、消防手熊谷音右エ門氏は、地震の直後附近を警戒中、大音響を聞きたるに津浪を予感し、下荒川県道工事大倉飯場前に津浪だーと大音声し騒ぎ立てたるに、人々皆戸外に飛び出

し避難する間に、鈴木幸男氏は自分の叔母が岩崎松の妻となりて海岸に住み居たりしため、岩崎に急を知らせんものと海岸に走り、その途中池田商店前附近で津浪だと叫びながら海岸に行きしため、その声を聞きて避難せる者もありたり。

唐丹村（釜石市唐丹町）役場の急報

三月三日未明に大惨害を蒙るや、本村役場では早くも県に向かって急報せんものと武山義助氏を依頼し、三日午前十時出発大畑局に疾駆せしめ左の如く打電せしむ。

ダイカイショウ　キュウゴ　タノム

トウニ　ソン　チョウ

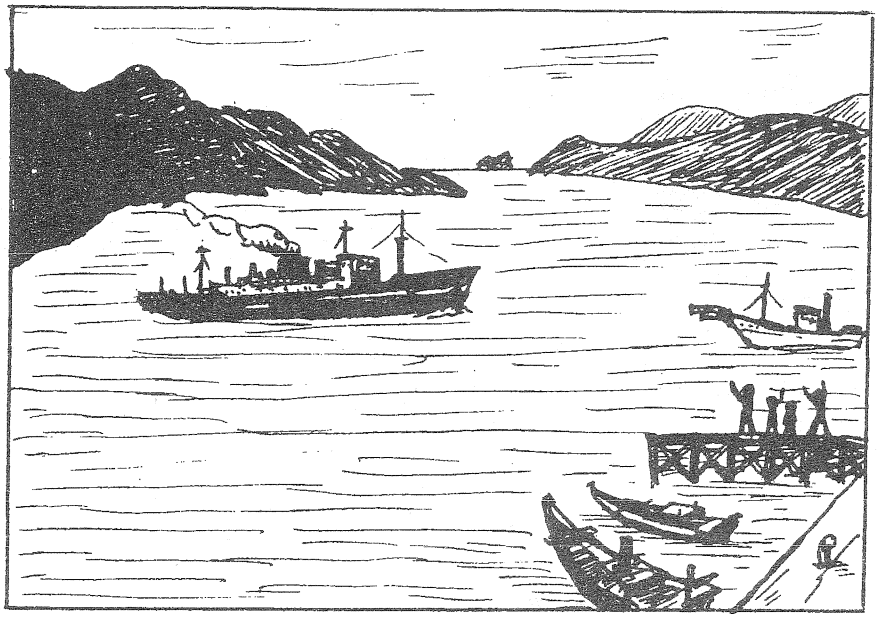
三日午後七時本村役場にては、書記木村鶴蔵氏、訓導小野忠男氏、郵便局員淀川正太郎氏、青年団員平野留蔵氏を急行せしめ、大畑局より県警察部に向かって救護班の急派方を打電せり。三氏は其の晩、夜通し帰りて経過報告をなす。

惨状偵察と海軍の救援

科学の進歩と通信機関の発達により、三日午前八時には早くも三陸沿岸津浪の惨状はラジオを以って全国に放送され、午前十一時頃に至るや霞ケ浦航空隊の水上飛行機及び内務省の偵察機、朝日新聞社の偵察機は爆音もいと雄々しく災害地上空を飛行し空中より写真を撮影し、此れを直ちに各地の号外に発表され、又活動映写機によりてフィルムを作成、各都市に於いては惨状は活動映画となりて発表されたり。

各新聞社の報道は、一報毎に惨又惨を加え、此れより各地の同情は翕然（きゅう）として起るに至れり。

此れより早く第一海軍区に於かれては、直ちに非常急救手段を構ぜられ、三日の夜には横須賀鎮守府より軍艦数隻に多大の被服糧秣を満載して急航せしむ。本村罹災者も飢えと寒さに生き残りし者も餓死する許りの所へ、四日の午前十時頃軍艦稲妻は黒煙濛々と入港し偉大なる船体を唐丹湾内に横たえたり。



救援船来たる

此れより軍艦のモーターボートは下され、陸戦隊の白脚絆の水兵達は勇壮なる扮装で毛布五百八十枚、醤油二十樽、米麦二百袋、菓子七十箱、罐詰七十箱を小白浜埋立に陸揚げし、堆く積み上げたり、此れを見た罹災民は感泣するのみなりき。

山林課の活動と罹災者の収容

残寒猶烈しき三月初旬に於いて、一瞬の間に三陸沿岸漁民の住宅は微塵もなく奪われてしまい、生存者は僅かに流出を免れたる住宅に皆押寄せ混雑の状名状すべからず、住むに家なく着るに布衣なき罹災者は只焚火に夜を明かす状態なりき。

本村の中小白浜部落にては、幸に学校と盛岩寺が残りしため大多数は二ケ所に収容され、外は残りし家々に配分されどうやら寒さを凌ぎ得たるも、本郷は只一戸のみ残りし家に数十人の罹災者は雑居し、外に住むべき家なきため大曽根の開懇地に行くものあり、或は

花露辺部落に行きて救助を求むる有様なりき。

片岸部落は山手の残りし家及び村社に雑居したるも、多くは川目部落に行きて収容されたるなり。荒川花露辺部落は、流出戸数少なく被害を免れたる家の多きため、割合に楽に収容さるに至れり。されども何時迄も斯くの如く不安定なる生活を辿る事能わず、一刻も早く各自のバラック建ての住宅なりとも要望して止まざる時に本県当局は早くも着目され、山林課の総動員によりて三陸沿岸全部の罹災民を一時バラックに収容すべく計企され、直ちに青森県に向かって材料の購入運搬に着手され、ために本村には二百四十戸分の材料が供給さるることとなり、一方罹災地には係員が急派され、盛岡に於いては建築大工を募集する等涙ぐましい活動は続けられたり。

本村には、最初県山林課照井勝也氏が派遣され尽力されたるに、都合に依り交代し、農林技手鈴木正愛氏派遣さるるに至れり。鈴木氏は、本村の惨状に甚だしく御同情を寄せられ、職務のためとは言い乍ら全く献身的に御奮闘なされしは、村民一同只感謝に堪えざる次第なり。

本村に於いては、本村助役又バラック建築の急務なるを賢慮され、小白浜部落にては未だ敷地の決定を見ざるため取り敢えず窮状甚だしき、本郷部落に九十戸分のバラック建設の計画を立て、本郷の佐野定吉氏、千葉内蔵氏の助力の下に着手し、村よりは訓導佐々木源次郎氏を嘱託特派し、本郷鈴木善三氏、佐久間磯治氏外罹災者一同又良く助力し、工事の促進に努力せり。

県よりは、盛岡にて募集の大工三十名及び労働奉仕の紫波郡赤石村（紫波町）の大工十三名、労働奉仕の青森県川内村大工五名、計四十八名は三月十日より建築に着手し、窮状を目撃せる大工達は一日も早く完成せんものと不眠不休の活動は続けられ、八戸港よりの材料の供給円滑に行かざるも、三月二十三日頃迄には五戸建バラック十六棟殆ど完成し、間もなく全部引越し罹災者一同は狭いながらも我が家として落ち着き八十戸の集団は打って一丸とすべき団結力と燃ゆるが如き復興の心意気を示

すに至れり。

小白浜部落にては、本郷部落に建築中各戸毎に敷地を設定し、建築することとなり各々高所の地を選定したるも、何れも狭隘の地多くために五戸建或は三戸建或は独立家屋等建設するに至れり。

小白浜部落に於いては、敷地の関係と家族の多きためと又職業的差異により多少の材料を添加して間取りを広くし、又独立家屋として各便利の地に選定し建築せしは一つの特色なり。四月半ば頃迄には殆ど完成移転するに至れり。

片岸部落にては、河東謙吾氏統制の下に、盛岡大工三十名を使役して六戸建、四戸建、二戸建等、殊に間取り等に意匠を凝らして建築され、三月末迄には完成移転するに至れり。

続いて花露辺荒川にもバラックが建築され、各移転するに至り殆ど四月二十日頃迄には村内全部完成され、一先ず我が家として落ちつき是れより各生業に対しての念慮を絖らし燃ゆるが如き復興心の下に起つに至れり。

皇室の御仁慈

東北地方は天恵薄く畏くも陛下に於かせられては、日夕御軫念遊ばされいたる土地なるに此の度の災害上聞に達するや、殊の外御心慮を御悩みあらせられ審らかに状況を調査せよとの有難き御沙汰を拝し、大金侍従は直ちに罹災地発向になり、早くも宮城県を視察になり、三月七日本県に入り大船渡、越喜来、吉浜村（三陸町吉浜）の惨状を視察、本村には午後五時過ぎ大石より海路古峯丸に乗船、小白浜埋立に上陸、連日の御疲労の模様もなく本村の惨状を石黒知事、一戸旅団長の案内にて親しく御調査になり、柴病院に収容の傷病者に対しては各室毎に慰問の言葉を賜わり、此れより直ちに自動車

にて本郷部落の惨状視察に向かい、その惨状に甚だしく同情を寄せられたり。

篝火焚いて出迎えし罹災民は、只聖恩の辱なさに感泣するのみなりき。

案内後帰庁して石黒知事謹話す。

（三月十一日、時事新報東北版に依る）

『大金侍従は、親しく災害地を視察された気仙郡唐丹村本郷部落及び小白浜部落の惨状は、言語に絶し一種凄惨な気分が満ちていた。侍従はその中を松明を焚いて詳さに視察し、罹災民に一々聖旨の有難さを伝え慰問したが、罹災民は只有難く涙を流すのみであった。

殊に侍従は、此処では実感が胸に迫ったようであった。

侍従は、親しく視察せよとの御諚を賜わって来たのであるからと、随行者が却って恐縮する程熱心に視察しその都度親しく慰問の言葉をかけ、殊に出征兵の遺家族に対しては特別の慰問をなしたが、罹災民は勿論県民を代表する知事として僕も今更ながら聖旨の有がたさに感激している次第である』

是より先畏くも陛下に於かせられては、三陸地方の災害を御聴取遊ばされたる折、直ちに御内帑金三万円を本県に御下賜になり、本村にては金三千百四十七円の御下賜を受くることとなり三月　日釜石町（釜石市）役場にて中野警務課長より伝達を受け、直ちに本村に於いては三月十八日午前十時小白浜小学校庭に罹災者一同を集め伝達式の挙行をなすに至れり。

皇后陛下に於かせられては、今回の災害に甚だしく御同情を寄せられ、特に傷病者に対しては、衣類一箱宛御下しになり、本村に於いては、木村助役は木村書記と共に四月十七日釜石町役場にて伝達を受け午後自動車にて帰村直ちに各傷病者に伝達をなせり。

津浪襲来と其の惨状

ドン……と落雷でもありしが如き―然も唯一つの音―
恐怖の念に籍られし人―枕を蹴立て素早く寝巻を脱し仕事着に着がえ飛び起きし瞬間―脳裡に閃めきしは津浪であった。
直ぐ様海岸へ出で海面を見し時―退け行く浪の音凄まじく―見るみる三陸汽船の何時も碇泊せし個所と思わるる辺まで真黒くなりぬ。
点々と水溜りを思わせる如く白く光る個所―悪魔の眼の如く―　鳴動する沖……将に確心ある津浪襲来の恐怖胸に浮かびぬ。
「津浪だぁー」
吾一人ならず十数人の人怒号した。
雨戸を蹴破る音……電燈消え、今は唯暗黒……
湾口は一層の危険を思わせる如く真黒の煙天に柱し……
数メートルの高さに覆いて走り来るが見ゆ
今は父母に、妻子に―兄弟に急を知らさんとすれど声出でず
家へ入れば人影なし
局坂へ向かいて走りぬ
道路一ぱいの人蟻の如く、子を抱きし者―父母の手を引きし者―然し声を出すものなし。
太い歎息と、重い足取りは進まず
寺へ逃げ行く人足の音か？

息づまる気、天地を圧す
一人なれば足早し。
高台へ至れば、泊花の附近真白く天に屹立する水柱、水柱、鐘楼堂の鐘の音―将に鐘の音……
数秒経過せし頃か？
ミリ　ミリ　ミリッ……
とガラスでも破れるが如き音すれば忽ちにして天に轟(とどろ)く音――暗くて見えず
高台に在りし人、皆無気味な静けさを保つ
一瞬にて明らかなり。
家倒壊せるを見る
数分後か？
二度の波、襲い来る
波高く大きくして家屋、石蔵皆押し流され、三度の波来たりし時は、河原を走るが如く岩石の転びあたる音聞ゆるのみなり。
湾口一面に材木なり。
津浪落ち着きし頃か？
父母を呼び、妻子を尋ぬる声……今は必死なり。
烽火(ほうか)諸所に上る
家内を家財を心配する人、烽火を囲みていろいろと語る
真っ暗なり
恐怖と失意――当に生けるロボットなり。

唸り声聞ゆとの報に接す。
走れば中村針師重傷なり。
大沢川の橋の下の材の下敷に―励ませど果なし
引き上げし時、既に事切れ黄泉の客となる
見れば血ぐるみにて頭部其の他数ケ所の創――
情報頻りなり。夜の中に知れる被害人命は死者六名、負傷者一名なり。(小白浜)
明くれば湾口一面の材の漂流―洗われし宅地の跡―惨状言うべからず。
引波強きか、大分の財海へ―尚渦流を起せりと思わるるが如く
ビルデング附近の家財、大沢川へ来たり居れり。
本郷如何にと早朝に至れば、小白浜に勝る惨状なり。
百二戸の家屋今は一戸を残すのみにて片影すら見えず
喚き声しきりなり。――
其の間に在りて新沼丈之助氏父子懸命に働き居たり
遭難者の談によると
本郷にては、あの大地震の際不安を感じ、家財を背負いて高台へ逃れしも一度家へ来たりし時、古老曰く「晴天に然も満潮時に津浪来るものにあらず」と頑迷なる言に依り安心をなし床にもぐりしと。
警戒者も少なく、北村の数人が海面を見入り、潮の退け行くを見て津浪襲来を知り知らすれども、寝につきし人なれば聞えざりしか?
かすかに声を聞きし者、スワと飛び起きし時は、既に海岸の家屋倒壊し得るが如き、急にて逃げし人皆大杉神社へ走る。

然るに道路狭く驚歎の余り脚上げ得ず声出でず
忽ちにして来る死の国―握りし手も、抱けし子も力尽き数珠つなぎとなりて海水の呑む所となりしと
二度、三度の浪は、丈余の高さに逆立ち、然も大渦流をなし財と生命を弄びしも、津浪後一時間程
は救いの声聞こえしと。
然も命を拾いし人々も、今は恐怖と寒さのため活動出来ず、唯聞くのみにて落涙するばかりなり。
二度深われ、三度の波にもまれ辛うじて生命を得し若者の談に依ると
「私は、一度家内と共に大杉神社境内へ逃れしも他の人一人も来らず、再び家へ下りし時、古老の言を聞き益々安堵し、家へ入ろうと家内揃うて歩を運びし時「津浪だー」という声を聞き、急いで母の手を握り坂屋の家の辺へ来たりし時、母と共に波に巻き込まれ施す術なく、母の手を離し必死になって泳ぎしも逆立つ波は材木を―石を空に飛ばし危険此の上なく、止むを得ず海中にもぐり口をふさぎ目途なく泳ぐ。何時しか屋根の如き物の下に居るに気付き、爪を持ってあらん限り引き裂こうとすれども裂けず、計らずも船のプロペラにさわる。
始めて船の下に居る事を知り上がろうとしてあせるけれども出来ず、三度の波にて打ち上げらる。
気が付きし時は、皆に介抱され居りし時なり」と、語を次いで「私は、母の手を離し泳ぎ歩き居る時、大部分の流泳中の若者達は、元気にて満州の兵隊を思い起こせ何これ位の事で死ぬものかとお互いに元気を付け合い居たるも、二度、三度の波に離ればなれになり声遠くなりし」と、暗涙にむせぶ様、いとど悲痛の極みであった。
斯様なれば本郷の死者最も多く、田老に次ぐ惨事を呈す。
落ち着きし今日聞くと、周章狼狽（しゅうしょうろうばい）とは斯くやと思われる程コッケイ至極なものがある。子供を抱き逃げしと思い見れば杉葉をギッシリ抱き締めて居るが如く。母と思いしは他所の叔母さんであった

等、其の光景聞くもいたまし。

時間的に襲来状態を記すなれば本郷最も早く、本郷の返し波花露辺を襲い、其の頃荒川片岸襲われ小白浜最後なり。

恐らく本郷と小白浜は、三分位の差ありたるもとに推察さる。

死者、負傷者多き本郷にては、部落民にて負傷者を収容出来ず、小白浜部落民の手助けにより新沼丈之助氏方へ急造担架にて運ぶ。然も零下四度の寒さなれば一刻を争うものを、未明に至りしなれば陸に上げられし人の大部は凍死す。

其の惨状亦言語に絶し、首のなき者、脳露出せし者、大腸はみ出でし者、之れが昨夕迄の人でありしかと、今更涙にむせぶばかりなりしは恨めしく思わる。

負傷者割合に少なきは前述の如く手不足と零下四度の気候の然らしむる所なり。

左に波高、秒速、死者、負傷者の統計を記せん。

波高　五米　　秒速　十米

部落名	総戸数 人口	被害戸数 生存者	死亡行衛不明	負傷	出動将兵被害	発動機船被害	小漁船被害	家畜被害	被害価額
花露辺	66 403	11 99	6 4	12	—	7	33	—	47,770円
本郷	101 620	100 297	117 208	21	1	9	52	豚 12 其ノ他 9	123,785
小白浜	160 958	104 566	3 4	6	1	21	100	其ノ他 35	571,964
片岸	48 301	33 199	2 4	—	—	1	17	牛 2	62,563
荒川	71 447	10 51	7 4	—	—	—	4	豚 1 其ノ他 18	9,782
大石	78 490	1 5	—	—	—	3	24	—	4,725
山谷	25 161	—	—	1	—	—	—	—	—
計	549 3,380	259 1,217	135 224	40	2	41	230	77	820,589

※ 家畜被害欄中ノ其ノ他トハ兎及ビ鶏ヲ含ム

◎ 地震　　3月3日午前2時31分39秒発震
◎ 海嘯襲来　地震後30分ヲ経過シテ襲来

救護団の活動

今回の三陸沿岸を襲いし津浪は、関東大震災以後の最大の悲惨を極めた天災なり。時恰も皇国多事の秋、挙国一致外には国難の打開に当り、内には只管銃後の守りを全うすべき時に、斯くの如き天災に禍いされたるは何たる不幸ぞや。惟うて一日もこの惨状を黙過し触わず、茲に於いて本県庁にては直ちに各地に向かって救護団の活動を依頼せるに、各地の同情翕然として起り、殊に本県は挙県一致非常の決心を以て隣保相扶奮然として起ち各消防組、在郷軍人団、青年団、自警団等陸続として来たり、廃虚の如き罹災地に夜具、食料携帯の上救援に尽力されたり。

本村に来たりし救護団は、本村の報道以上の惨憺たる惨害に甚だしく同情され、惨害の整理復旧に流失家屋の取り片附けに、慰問品の配給運搬、家族の救出、死体捜索等涙ぐましき活躍を続けられ、罹災民をして豁然として悟らしむるに至れり。

本村は、地理的関係より窮状は良く、県社会課警察部等に知悉せらぬために救護団の派遣割合に遅く、三日四日五日の中は村内救護班のみにして、六日に至り和賀郡小山田村（東和町）消防組の遠く来村せるを見て、罹災民は嬉しき涙を以て迎えしなり。

三月三日　本村駐在巡査三浦正雄氏は、三日朝本郷の惨状を直視するや救護班の必要に逼られ、機敏にも荒川県道工事着手中の有田組、田村組に消防員を急馳せしめ救助を求めたり。此の急報に接し両組に於いては落成期限の切迫せるにも拘らず工事を休止し、有田組石川昌三氏外五十二名及び田村組大倉喜作氏外五十名は直ちに現場に急行し、死体の捜索に重傷者の収容に運搬に尽力されたり。

三月六日　七日　八日　和賀郡小山田村（東和町）消防組

組頭菊池浩一郎氏外二十二名、本村には他町村救援団としては最初に来村され、宿所を小白浜小学校に定め、本郷部落に赴き死体の捜索に或は跡片附けに尽力され、罹災民の狂乱せる間にも良く同情且つ激励の言葉を与えつつ三日間の救護に努力され、予定の活動を了えて無事九日帰村せられたり。

三月六日　吉浜村消防組全青年団

吉浜消防組第二部長白木沢平太郎、第三部長水上助雄氏外二十二名は、自村吉浜村も相当の被害を受けたるも、本村の窮状を聞き、特に六日に来村せられ本郷部落の跡片附け、其の他に尽力せられたり。

三月八日、九月十日　岩手郡本宮村（盛岡市本宮）青年団

団長小笠原静雄氏外二十三名は、遠く本村に参りて宿所を学校に定め、本郷部落の死体捜索及び跡片附けに尽力され、小笠原団長の指揮宜しきを得、喇叭の合図に凡ては規律的訓練の下に奮闘され、作業の跡も歴然と四日間の予定を終えて部落民の感謝の涙に送られつつ帰村せられたり。

三月十日 十一日 十二日　和賀郡二子村（北上市二子町）青年団全補習学校生徒

団長高橋信太郎氏、全理事梅木義夫氏外三十名は、九日来村せられ、宿舎を小白浜小学校に定め、十日より本郷部落にて作業に従事せり。団長高橋氏は、二子補習学校の専任教員にして良く三十名の団員を統督し、十日朝本郷部落に至り死体茶毘の煙に包まれつつある惨害の中に立ちて団旗を前に一同は整列し、津浪溺没者の英霊に対して屢々黙禱を捧げられ、其の後愈々作業に着手せられたり。

此の頃は丁度本郷部落に於いては、八十戸分のバラック建築に着手すべく、八戸港より運送船が材料を満載し午前十一時頃本郷港に入港せり。船は材料運搬に寸暇も無き時なれば、夜半に至るとも陸揚げを終了すべき船長の意見なり。この陸揚げ作業に二子青年団高橋団長に依頼せるに、高橋氏は、自分等は非常の覚悟にて来たりし者なればとて此れを快諾され、団員一同は部落炊き出しの握り飯に

空腹を凌ぎ乍ら海水に浸りて陸揚げし、昼の疲労の色も見せず午后九時過ぎ迄奮闘せられ、廃虚の跡に月影淡く煙に包まれて凄惨極まりなき本郷部落を夜半に引揚げたり。

翌日よりは八十戸分の堆く海岸に積み上げられたる材料を現在のバラック敷地迄運搬し、或は良く惨害の跡片附け等に尽力され、予定の日数を無事終えて帰村するときは、団員殆ど肩を腫らし足を痛め部落民の涙の見送りに十三日未明釜石経由帰村せられたり。

其の後仝青年補習学校は、成績優良にして文部省の表彰を享けられしは、慶賀に耐えざる次第なり。

三月十一日 十二日　気仙郡日頃市（大船渡市日頃市町）消防組

日頃市消防組小頭佐藤万次郎氏、第一部長鈴木佐太郎氏外七十名は、十一日、十二日の二日間本郷部落と小白浜部落とに二分してバラック材料の運搬、バラック敷地の整理作業に尽力し、十三日正午頃無事予定の任務を終えて帰村せられたり。

三月十一日 十二日 十三日　和賀郡岩崎村（和賀町）青年清明会

清明会とは、県民諸子の知悉せる石黒知事主唱の六原青年道場終了者を以って組織せられたる青年団にして、此の清明会員及川光茂氏外十名は十一日来村され、元小白浜消防屯所に宿舎を定め、日頃鍛えし腕を持って本郷部落の整理に、バラック材料運搬に尽力献身的努力を捧げられ、十四日予定の行動を了えて帰村されたり。

三月十三日 十四日 十五日　和賀郡飯豊村（北上市飯豊町）青年団

飯豊青年団斉藤忠勝氏外十七名は、十三日来村、盛岩寺本堂裏に宿舎を定め、小白浜部落の材料運搬、本郷部落の整理、気仙水電電柱架設作業幇助等に従事し良く献身的に尽力され、十六日予定の行動を終了し帰村せられたり。

三月十二日 十三日　胆沢郡古城村（前沢町）青年団

古城青年団副団長小野寺正治氏外十名は、釜石にて救護作業に従事し釜石より帰村の予定なるに、釜石にて本村の窮状を聞き十二日本村に到着、小白浜校に宿舎を定め、本郷部落のバラックの材料運搬或は惨害の跡片付けに尽力され、十四日無事帰村せられたり。

三月十三日より十八日まで　紫波郡赤石村（紫波町）楼町大工

建築請負業鈴木永治氏十二名は、労力奉仕として十二日来村せられ、本村の窮状に殊に同情し、一日も早く罹災者に住宅を与えんものと本郷に小屋掛けをなして宿舎とし、十三日より直ちに本郷バラック建築作業に従事され、県大工と共に不眠不休の努力を続けられ、十八日迄に五戸建バラック一棟半を建築し、無事予定の奉仕を終えて帰村せられたり。

三月十二日から十九日まで　青森県下北郡川内村大工笠井盛三氏外四名

右五氏は、遠く青森県より本村に参られ、本郷バラック建築に労力奉仕として奮闘せられ、盛岡大工、赤石村大工達と共に不眠不休の奉仕をなし、五戸建バラック一棟を建築し予定の奉仕を終えて帰省せんとせるに、本村木村助役より猶引続き従事せられたきことを懇請されしに、事情諒察笠井氏、高田藤吉氏、工藤兼吉氏の三氏は後迄残り従事することとなり、本郷バラック完成後は花露辺のバラック建築をなし、四月末に罹災者の感謝を受けつ名残り惜しくも遠く帰村せられたり。

三月十三日　釜石町（釜石市）白浜消防組

仝　白浜青年会

隣村白浜青年会、消防組は、白浜部落の惨害取り片付け中なるも本村の窮状に同情を寄せられ、特に十三日本郷に海路来たりて死体捜索或は惨害の跡始末に援助され良く尽力されたり。

三月十三日　十四日　日頃市消防組

第三部長鈴木伊太郎氏、第四部長杉山仁右ェ門氏六十九名は、第一部、第二部と交代に来村せられ、

小白浜校に宿舎を設け、小白浜部落の跡片付け或は小白浜校に収容されたる罹災者の炊事小屋の小屋掛け等に尽力され、殊に塵芥等の焼却をなし、此れが消火にポンプを使用して打ち消し、小白浜部落罹災者に不安を抱かしめざるは真に感謝に堪えざる次第にて、十五日無事予定の行動を終了して帰村せられたり。

三月十四日　十五日　　胆沢郡真城（水沢市真城）青年団　二十五名
　　仝　　自警団　十六名

統導員真城小学校訓導高橋清見氏、自警団第一部長瀬川勝雄氏、第三部長及川力雄氏、第四部長梨川一郎氏外三十七名は、気仙沼より三陸汽船にて十四日来村せられ、盛岩寺観音堂に宿舎を定め、本郷に赴きバラック材料の運搬及跡片付けに従事し、殊に自警団員一同は海岸よりバラック住宅地迄の道路を修理する等、全く献身的努力を捧げ、十六日予定の行動を終えて無事帰村せられたり。

三月十五日より十九日まで

岩手中学校配属将校現役陸軍少佐小林島司氏、仝校教諭志賀義雄氏外仝校五年生十名は、十五日来村せられ、始めは本郷部落北岸に天幕を張り奉仕作業に従事し、半ばになりて盛岩寺観音堂に移転し、本郷に通いて尽力せり。十名の生徒は、皆盛岡良家の子弟なるに仝校の体験労作教育の方針より此の度罹災地に特派することとなり、来村されし十五日の日より直ちに着手し、金ボタンに巻ゲートルの姿勇ましく、本郷バラックの材料運搬、惨害の跡始末、雨天の日は罹災民収容所たる小白浜小学校の舎内掃除迄さながら学校にある如き厳粛なる規律を守り献身的に奮闘せられたり。

作業半ばにして小林先生の御令息急病のため突然御帰盛されたると、又生徒の中厨川駅長の御子息盲腸炎を起し就床し、父上と兄上の態々当村に御出で下されしは誠に御気の毒にて同情に堪えざる次第なりき。されど志賀先生の統率の下に九名の生徒は無事予定の行動を終えて、十九日帰盛の途に上

れり。

うら若き青年学徒の将来に於いて定めし思い出深くし、又偉大なる体験を得し事を想うて猶将来の成功を希うと共に岩手中学校の発展を祈る次第なり。

三月十八日　十九日　胆沢郡小山村（胆沢町）徳岡在郷軍人分会

小野寺久吉氏外十名は、釜石に於いて救護作業に二日間奉仕し帰省せんとせるに、小野寺氏は本村の被害甚大なるに同情され、是非本村にも奉仕せんことを主唱し、一同を動かし遂に十八日来村せられ盛岩寺本堂裏に宿舎を定め、小白浜部落に陸揚げせられ、二十日予定の行動を了えて無事帰村せられたり。

三月二十一日二十二日二十三日　稗貫郡湯本村（花巻市湯本）青年団

団長高橋正右エ門氏十四名は、二十一日来村せられ小白浜小学校に宿舎を定め、小白浜部落のバラック敷地作業に活動され、雨降りの日も物ともせず良く尽力され、二十四日朝予定の行動を終えて三陸汽船にて釜石経由帰村せられたり。

三月二十二日二十三日　胆沢郡南都田村（胆沢町）東田土工園

全土工団長高橋嵐男氏外十名は、二十一日来村せられ二十二日より本郷小白浜間の県道の修理工事に尽力され、二十四日無事帰村せられたり。

此の後盛岡聯隊区の命を受け、盛町在郷軍人分会刈屋友治氏五十名、世田米村（気仙郡住田町世田米）在郷軍人分会、横田村（陸前高田市横田町）在郷軍人分会菅野彦七外六名等来村せられ、其れぞれ惨害の整理に敷地の作業に尽力されたり。

罹災者と救療班の活動

『罹災者の健康状態』

連日厳寒の襲う三陸罹災沿岸地方は、気温の低下甚だしく九日頃は零下一〇度七分という。薄着の罹災民にとっては殺人的寒気が訪れ、ために感冒流行し、中には急性肺炎を併発して重態なる者も出来るに至れり。

本村に於いては、小野寺孟夫氏の長男小野寺芳信君（三才）及び赤羽正夫君（二十二才）が学校に避難中に急性肺炎を起し、一時は重態なりしも漸次経過良好なりき。外多くの罹災者は良く健康を保持し居たるは、良く防寒に留意せられたるによる。只配給品は、単一食物にて米、鰹、鱒、鮭、鯖、福神漬のみにして、野菜類、新鮮なる魚類、味噌類等の要求多かりしなり。

『罹災者の津浪直後の精神状態』

津浪直後の罹災者の精神状態は、先ず誰もが考えたるは近親者の安否を気遣いたるものの如く、事業家は又漁船漁具の安否を、一般罹災者は自己の家、家財道具の安否を考え、此等が判然し行くにつれて家族の将来に対しての生活上の煩悶に皆茫然たるものの如し。

『救療班の活動』

救療班の活動を記すに当たり先ず特筆すべきは、柴診療所の活躍なり。即ち明治二十九年の津浪に際しては、本村は甚大なる惨害を被り数多の死者を出し、重軽傷者又多かりき、此の重傷者救護のため全く献身的努力を続けられ村民一同の感激を受け、又其の筋よりも其の功績を褒賞され、柴琢治氏は再び此の悲惨極まりなき津浪に遭遇せられ救護診療に献身的活動を捧げられしは、罹災者一同感

謝に堪えざる次第なり。

特に今回の津浪に際しては、前回の津浪による尊き体験と一昨年釜石病院唐丹分院として新築せる建物充実せる諸設備とに依りて萬遺漏なき救療を施されしは、又真に幸甚の至りなり。

三月三日

柴琢治氏は、未明津浪の襲来を知るや直ちに小白浜部落の負傷者を救護せんものと惨害の中を踏査され、磯崎六之丞氏妻タカの孫ウタ子（七才）を背負い、頻死の状態にて倒れ居たりしを探し出し応急処置を致されし、其の甲斐なくタカ女は惜しくも黄泉の客となりしも、背にありて今や凍死せんとするウタ子は救い出されて早くも手当を受けしため一命を取り止め得たるは、全く柴琢治氏の神速なる活動による者なり。

未明なるに柴琢治氏は、看護婦平松マサ女を伴い三浦巡査と共に本郷に急行せり。着するや本郷は重傷者の呻吟、死者の伏屍阿鼻叫喚の巷たり。直ちに負傷者に対しては救急処理を施し、頻死の状態の者に対しては焚火をなして暖を取る等、神妙なる活動をなされ後此れ等負傷者は全部小白浜診療所に運搬収容し、此れより両川重吉氏、鈴木フヨ女、大向フミ子、小野寺末子女の助力の下に全く全院一同涙ぐましき活動が展開されたり、斯くしている中に遠く其の窮状を聞き、救療班の応援団来村せられ良く応援せらるるに至れり。救療応援班の状態を略記せん。

三月四日より六日まで

花巻共立病院救護班

医学博士　草刈兵衛氏　　看護婦　小原フジ女

外科副医長　飯田研三氏　　〃　千枝ウヨ女

薬剤師　森川秀吉氏　　〃　千田タミ女

三月四日より十三日まで
東京府（東京都）救護班
東京府救護主事　横島常三郎氏
医学博士　小島栄治郎氏
医学士　田中淳氏
仝　田中盛親氏
看護婦　藤本サワ
〃　本田末子
〃　確永あさじ

三月六日より八日まで
逓信省（郵政省）診療班
嘱託医　小原幸作氏
看護婦相沢エン女
事務員　戸島千秋

三月十二日より二十日まで
岩手医学専門学校生徒救護班
岩手医専四年生　田村彰氏
仝　柴田清治氏

三月二十三日より四月七日まで
岩手医専四年生　佐藤政勝氏
仝　北條昌弘氏
仝　日戸太郎氏
仝　王壬癸氏

三月二十四日より三月二十八日まで
盛岡一戸医院　一戸氏

以上の如き応援を受けて治療を受けし者二百八十余名の多きに達し、三ケ月に亘る柴診療所全員の献身的活動は実に偉大なるものにして長く感謝の一念として罹災者一同の脳裡に深く刻まれたるを惟うて筆を止む。

湾内流失物の処置

恐怖と失意の呑底へたたき落されし今は、唯生命の貴きを知るばかり、骨肉の父母兄弟―数十年の蓄財…瞬時にして去りしを思えば暗涙のみ。

茫然自失其の去就を知らず明日の食を…否今日の食を如何にすべきか？右に左に心は落ち付かず、腕をこまねぎ惨害を見入る様狂人がと怪しまる、渚に遊ぶ財は今は恨めしく見ゆるのみ。

骨肉の死体すらも人手のなす所、況んや財に於いておや

流失物湾内に満つあれども心にあらず、あまつさえ船なく蒐集に努める者更になし。

然れども何時迄斯くあるべき生きし者のなすべき事の一々を知りし、村有志は殆ど被害なき、大石浜よりの二艘の発動機船と五艘の小船とを以て蒐集せしめんとす、然れども自分達の財なれど拾わんとする罹災民なし、非罹災民之れに従事す。

三日には発動機船並びに小舟の繋索をなし他の物の蒐集も心掛けしかども意の如くならず、船を出せしは昼頃なれば海遠く去りし物亦数うべからず。

単司梱などは皆破られ形なく、陸より蒐集可能のものの外海水の弄ぶ所となる。

陸上にありし物は、各自拾い歩き三日の後には陸上殆ど整理され、四日の後より小船にて海中に没せし物の蒐集に努む。

然れども海底は一面の泥にて意の如くならず、本郷湾など二米程の泥海との事なり。然れば意の如くならず、必死の努力にて反物衣類など拾い上ぐ。

米俵炭などは皆罹災民の食料薪炭となり、反物衣類などは立会の下に各自に下渡す。

所有者不明のものは皆配給所にあてられし学校へ運び乾かす、後入札になすとの事。

材木、畳などは皆陸上げなし、不明のものは役場保管者となり、公共建築材になす。

流失材湾口を塞ぐ程の多数なりしも、蒐集すべき心なき為活動遅く湾外へ流失せしは残念なれども其の心境に至れば斯くなるものと今更口惜し。流失せし財の統計を左に記さん

罹災救助品配給状況調　五月三十日現在

種目	本日までの受入高	仝　配給高	差引残数量
米	八二五	八二四	一
味噌	一三五	一三四	一
醤油	一三四	一三四	〇
漬物	九二	九二	〇
野菜	一八一	一八一	〇
布団	一、三一〇	一、三一〇	〇
毛布	一、八三九	一、八三九	〇
木炭	一、六九一	一、六九一	〇
其の他	二、一二六	二、一二三	三

慰問品の配給

住むに家なく、喰うに食なき罹災民唯救いの神を待つのみ。

通信機関の一切は途絶し、飛脚のなす所さながら昔に帰りしが如く、移入で生活を保ち居る罹災民なれば、山谷荒川片岸方面よりの食物の応援意の如くならず、当局為に苦慮す。

然るを県の活動敏活にて、三日前七時というに庁員招集せらしとの事、四日より釜石署下四ケ町村は配給は開始せらる。

県庁配給吏員たる社会課員、不眠不休にて警察部の被害調査と町村よりの被害調査報告とを基礎として町村別配給率を定め、全国各地よりの慰問品並びに県よりの配給品を即日配給なすの敏捷さ。慰問品の亦多数にして其の敏捷を以てして、尚本署広場並びに本署正門前道路に山積す。

終日汽車、汽船、トラックにて海陸両路より来る物数えられず、其の荷受けさえ終日の仕事と思わる。山積せる荷物は非罹災町村よりの応援消防夫並びに青年団員により、四ケ町村へトラックにて直接に又は間接に運搬さる。

彼等亦不眠不休にて、荷受けに荷渡しに握り飯にて活動を続く、其の活動たるや涙ぐまし、吾々罹災民感謝の言葉なし。

本村にても早速配給船金比羅丸を廻航せしめ配給を受く。四、五日の間は消防夫派遣し配給船への積み込みをなせしも、翌九日より小白浜青年会員之に当る。

会員未明釜石本署配給所に至り窮状を訴う。

然れども率(そつ)の示す所如何とも仕難し不得止(やむをえず)。かくなれども青年の血を吐く窮状の叫びと苦痛を訴え

れば吏員を動かさずに置くものか、遂に吏員の本村派遣となり、翌日より配給船二十トンの船は満船にて帰航するを得、村民の咄嗟の生活並びに人心を安定せしめしは、真に熱ある青年の活動と吏員の時宜に適したる最良手段の誠意ある所と村民非常に感謝し涙を流し、日本国家の有難さをしみじみと述べしは、非常時日本にふさわしき状景なりしなり。

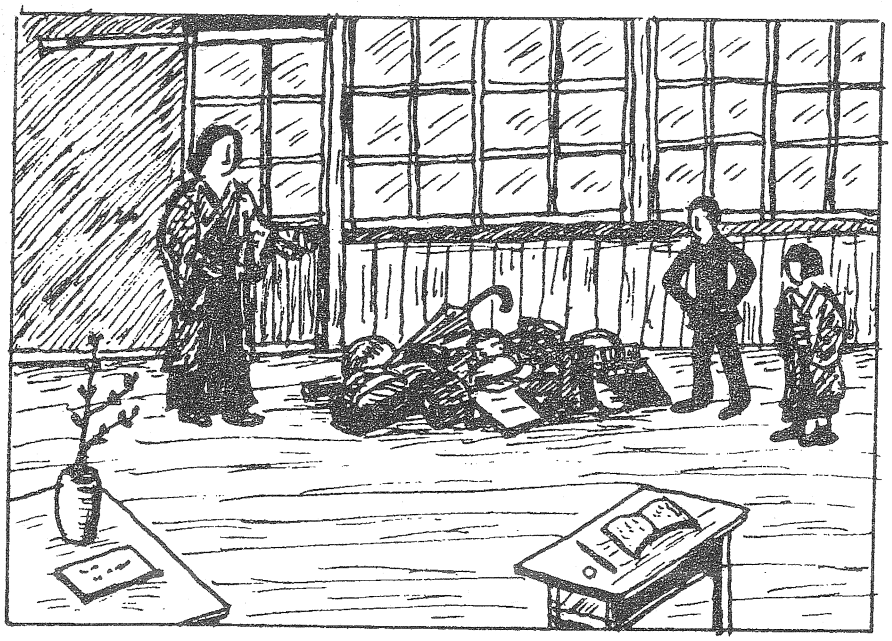
十四日より第一部消防組と青年会と二日交替にて配給を受くるに至る。全国民の同情は数日ならず日毎慰問品山積す。配給船何時の日も満船にて帰航す。

今は旧に倍せる如き衣類の山、然も二月に渡る全国民の同情如何に文明文化と言いしも斯くばかりなるを今更ら驚き、日本国民への心情益々強く感謝の念禁ずる能わず。

斯く運搬せられしを村吏員の手より各部落区長へ被害率に依り配給をなし、更に区長より伍長へ、更に伍長より各人へ数に依り配給す。

衣類は、目分量にて山になし分け番号を付し抽せんに依り分配す。米、味噌は、計量器の示す所より下駄、ござ、其の他の物も略確実に配給せらる。然も今日に至れば必要品皆揃え日常事欠かざる状態にして、全国民よりの同情身に泌むを覚ゆ。

慰問袋など受け取るを其の日の楽しみと考えるに



見舞品（学童用品）の山

至りさながら玉手箱を戴くが如く、其の中には可憐なる子供よりの手紙や血を吐くが如き激励の手紙など数知れず、一層の元気と意気を植えつけられしは感激の外なし。

斯く確実なる配給をなし得たるも之れ皆全国民よりの多数の慰問品と各人の自覚によるものなり。然れども人心未だ不安状態去らず、恐恐の折柄デマよりデマ飛び、其の不安一層なり。

津浪再来…流失物のいんとく、配給品の不平等々頻なり。

関東大震災も斯くやと思わる。其の間にありて花巻署よりの警部殿以下十数名の警官の心痛餘りあり。応援警官亦三浦本村駐在巡査と共力し、死体検視に人心不安一掃、秩序恢復に、他方には損害調査に日夜労苦を惜しまず東奔西走よく努力致されしは感謝に堪えず。斯くなれば警官の努力は報いられ、人心不安一掃し安んじて跡仕末に従事し得る機会を与えられたるは喜ばしき所なり。当時来たりし警官の芳名並びに本村配給係員の氏名を記せん。

警察官　花巻署　今野巡査部長外六名＝警護治安維持。　衛生課福地警部＝衛生。
唐丹村配給係　松田勇蔵、木村鶴蔵、高橋正、各区長、各伍長。

死体捜索と始末

『死体捜索』

余りに大きい瞬時の徒ら、誰れが予想したであろう。

未明鱈縄へ送りし妻が、子が今日の日に迎えざりしか

昨日の喜びは、今朝は悲しみとして迎えねばならないとは誰れが察知したであろう。三百有余の物言わぬ人…今は何処に去りしか？　尋ねんとするに目途なし、僅かに百有余の死体のみ……

他町村よりの応援隊員と消防、青年の力に尋ぬれば今は、はかなし
首なき胴、顔つぶれ、材木の下敷に、塵を覆い人名すら明白ならざる人、見るも無惨なり。
近親之を呼べば血を吐くの古語を信ずる遺族懸命に之を呼ぶ
父は子を、子は親を……兄弟を、伯叔父母を……此の世の地獄……名状すべからず。
今は陸を隈なく探せど、尚見えざりし二百余の死体……
一るの望みを海に托し小舟をもて捜せど見えず、潜水夫に依れども空し。力尽きたる遺族トロール船に依り捜索す、亦空し。
暴浪に奔弄されし霊は遠く去りしか。
当初よりの望み今は絶え、暴風雨に依る偶然を頼みとするに至れり。
数日にして暴風雨来たれども見えず、頻りにデマ飛ぶ、汽船数十個の死体を見しとか、海底深く沈みしとか
恐らく湾口外に出で遠く南の国へ去りし者と推察さる
津浪当時、南潮激しく風激しきなればなり。
死者と断定さるべきも、法規の示す所如何ともしがたし。
亡霊となりしも、尚生存者となり居るは気の毒の極みなり。
『死体の始末』
今は望みなき死体捜索
発見されし者ばかりも懇(ねんご)ろに葬りたしと考えるもならず
昨日迄戯れし幼子いつくしみし父母……面影なき死体を受け取る。
近親の心情……誰が知り得よう。

医師の検視後近親之を引き取り、一家内の者は一度に重ね死せし姿にて薪を重ねて焼く。
跡仕末未だならざる凄惨な海岸に三々五々に別れ、青白く光を眺め刻一刻黒く焼け行く父母、兄弟、
妻子……卒倒せんばかりの気なり。
昨日の宅地、今日の大葬場
運命の皮肉……
男なるが故に声を出せず、歯を食いしばり朝迄凌ぐ心中、
遺族ならでは味わい知らざるものであろう。
焼けし跡始末、亦惨なり。
打ち上げられし生箱（生魚入れ箱）或は醤油樽へ手をもて骨を拾い、之に入れ担いて寺に持ち行く様
何に例えよう。
或遺族語る。
「何の罰でこんな事になったのだろう。生きた自分は幸福なのだろうか。河原で焼き、魚箱へ骨を入
れる私はつらい、こんな事なら一緒に死にたかった。」と。
目がしらをふく彼は、幸と言おうか不幸と言うか言葉を知らず
唯頭の下がるを覚えし記憶、尚新たなり。
骨が皆本堂に安置され、来たるべき慰霊祭迄安置し置くとの事なり。

村内各種団体の活動

痛手を受けし各種団体……僅かに山谷、上荒川のみ難を逃る。

然れども団体に席を置く各人皆一斉に立つ、名簿其の他流失せしも曲りなりにも統制を付け活動せしは、団体にあらねば出来得ざる所なり。配給品の運搬に、死体の捜索に始末に、流失個所整理に真に涙ぐましき活動でありしは感謝の至りなり。左に各種団体の活動状況を記せん。

消防組

部名	仕事の種類	出動延人数
第一部	配給品の運搬、罹災者への物品配給、流失個所整理	九〇九名
第二部	流失個所整理	八〇名
第三部	流失個所整理、配給品運搬	四一六名
第四部	仝	五六〇名
第五部	仝	三二五名
第六部	仝	三九二名

青年団

第一分団	流失個所整理	
第二分団	仝	
第三分団	仝	
第四分団	仝	
第五分団	仝	配給品運搬
第六分団	仝	
第七分団	仝	

女子青年団　炊き出し及び罹災者収容の諸世話
愛国婦人会　満州派遣兵家族慰問

三陸沿岸に周期的に襲来する此の津浪の災害に対しては、吾人は周到なる予防避難方法を講じ、再びかかる惨害を蒙らざる様今に万全の策を立てられんことを切望する次第なり。参考として震災予防評議会編纂津浪災害予防に関する注意書より抜萃して左に記す。

記

第一章　緒　説

港湾は、其の地形、水深分布及び環境等に於いて千差万別あるを以て津浪罹災地の浪災予防法を講ずるにも、亦其の規を一にすること能わず。

但し三陸太平洋沿岸に見るが如き港湾は、其の大同小異に従いて之を若干個に分類し得べし、本注意書に於いては其の各部類につき標式的のものを選択し、之に対する津浪の加害状況を考え之に適すべき浪災予防法を講究することとせり。

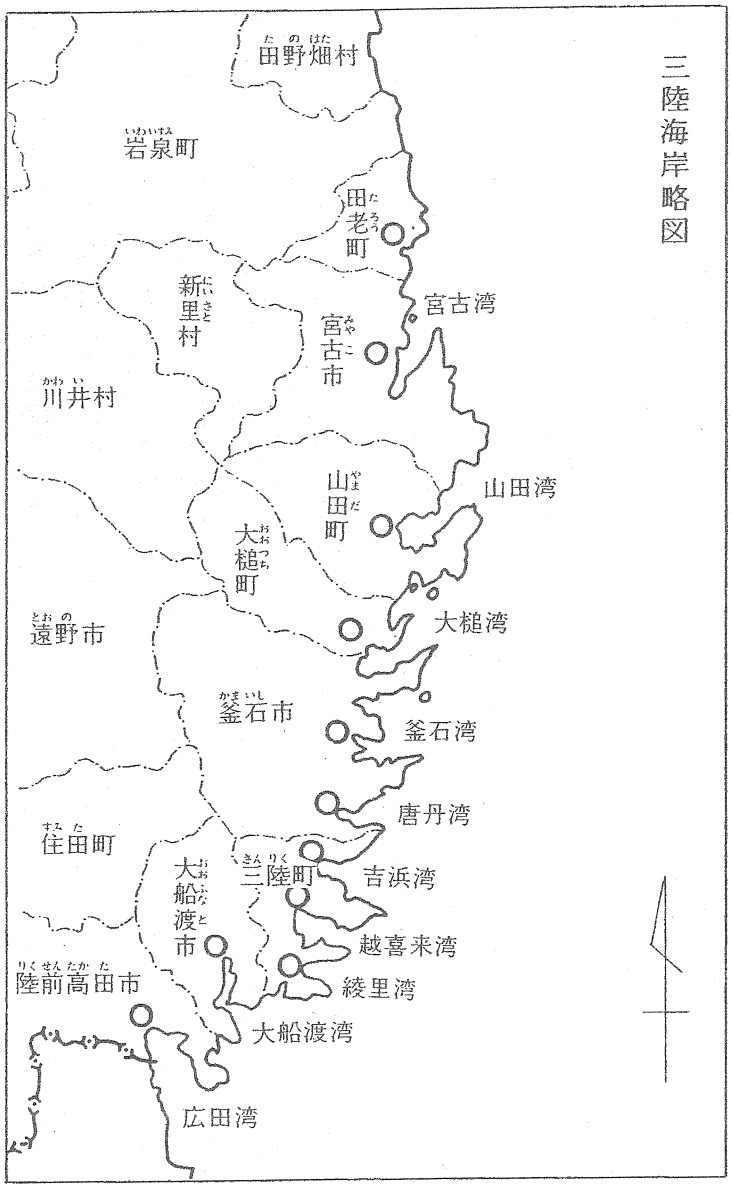
惟うに今回の津浪に於いては、罹災町村部落二百を以て数うべし、其の地理的状況一々相異なるべきも小異を捨てて顧みざるに於いては、何れの一を取るも其の前記標式的のものの何れかに近きを発見するに至るべく、従って其の地に適すべき浪災予防法も亦之を類推するに難しからざるべし。

末段数個の実例を挙ぐ、是れ其の類推を容易ならしめんが為なり。

第二章　海岸線の形状及び海底の深浅と津浪の加害状況

津浪は、平常の水準面上二、三十米の高さに達することあるを以て次に記す。

港湾の地形は、各々の場合に相当する高さを修正して考えるを要す。例えば平常の水準にてはV字形ならざるものも、水準を若干高めるときは其の形式に近づくものあるが如し、三陸沿岸に普通見るが如き港湾に於いては、湾彎の深さ甲乙類に於ては概して三、四十米乃至七、八十米なり、とす。



三陸海岸略図

甲類　直接に外洋に向える湾

第一　湾形V字をなせる場合……津浪は湾奥に於いて十米乃至三十米の高さに達し、汀線に於て一層勢いを増して浪を更に高所に打ち上ぐるを通常とす。

綾里湾、吉浜湾、姉吉、集、十五浜村荒等此の部類に属す。

第二　湾形U字をなせる場合……津浪は前者に比較して稍軽きも高さ十五米に達することあり。

田老、久慈、小本、大谷等此の部類に属す。綾里港は其の変形と見るを得べし。

第三　海岸線に凸凹少なき場合……津浪は其の高さ前記第二に近くして稍低く十二米に達することあり。

吉浜村千歳、赤崎村長崎（大船渡市赤崎町）、十五浜村大須等此の部類に属す。

乙類　大湾の内に在る港湾

第四　港湾V字形をなして大湾に開く場合……津浪は第一の形式を取るも波高稍低く十五米に達することあり。

船越、山田の両湾に連なれる船越両石湾に開ける両石港、十五浜村相川等此の部類に属す。

第五　港湾U字形をなして大湾に開く場合……津浪は第四に比較して一層低く、波高七、八米に達することあり。

広田湾に開ける泊、釜石湾に連なれる釜石港、大槌湾に連なれる大槌港、追波湾に開ける船越湾等此の部類に属す。

第六　海岸線凸凹少なき場合……津浪は第五に比較して一層低く四、五米に達することあり、又破浪することなく、単に水の増減を繰り返すに過ぎざる場合多し。

山田湾内に於ける山田港、大船渡湾に於ける大船渡港等此の部類に属す。

丙　類

第七　湾細長く且つ比較的に浅き場合……津浪は概して低く波高漸く二、三米に達す。

気仙沼湾此の部類に属し、女川湾之に近し。

丁　類

第八　九十九里浜型砂浜……海岸直線に近く海底の傾斜比較的に緩やかにして津浪は其の高さ四、五米に達することあり。

青森県東海岸、宮城県亘理郡沿岸等此の部類に属す。

港湾は其の形状、深浅に従い以上の如く数種に分類し、各の場合に相当する波高限度の概数を記載せるも、湾側及び湾底の凸凹屈曲等の津浪に与うる影響も亦決して軽視すべきにあらず、屈曲凸凹甚だしきときは浪勢之に由って減殺せらるるに至るべく、従って同型に属する港湾に於いても其の環境の如何によりて波高限度に多少の差違ありと知るべし。

第三章　浪災予防法

高地への移転、浪災予防法として最も推奨すべきは高地への移転なりとす。尤も漁業、海運業等の為に納屋事務所等を海浜より遠ざけ難き場合あらんも、然れども住宅、学校、役場等は必ず高地に設くべきものとす。

三陸沿岸の町村部落は、概して山岳丘陵を以て囲繞（いじょう）せらるるを以て多少の工事を施すに於いては、適当なる住宅地を得るに甚だしき困難を感ぜず、但し漁業者にして住々高地住居の不便を唱うるものあれども業務上の施設を共同にし、且つ適当なる道路を敷設するに於いては其の不便を除くを得べし。

実に船越村（下閉伊郡山田町船越）山の内の如きは古来此の方法を実行し、千数百年来未だ曽て津浪の害を被りたること之なしと称せり。

第一の如き港湾に於いては固より、第二、第四の如き場合に於いても亦津浪を正面より防禦するは実際上殆ど不可能に属す。斯くの如き場所に於ける浪災予防は津浪進路の正面を避け、其の側面の高地に適当なる移転場所を求むるを唯一の策とすべし。船越村山の内、吉浜村、本郷等適例とすべし。

後章綾里村（気仙郡三陸町綾里）、両石、田老、釜石等に関する案を掲ぐ。

安全なる高地は鉄道、大道路の新設或は改修に当りても之を利用すべく、特に鉄道駅に就て然りとす。

其の他浪災予防法として推奨すべき諸方法を列挙すること次の如し。

防浪堤＝防浪堤とは、津浪除けの堤防の謂いにして海に設くるものと陸に設くるものとの別あり。普通の防波堤は風波を凌ぐに足るも、大津浪に対しては其の効果を期し難し、之を津浪に対して有効ならしめんには、其の高さに於いてもまた其の幅に於いても更に幾倍の大きさに増さざるべからず。費用莫大なる為実行困難ならん。

防潮林＝防潮林は津浪の勢力を減殺する効あり、海岸に広濶なる平地あるときは海浜一帯に之を設くるを可とす。高田町沿岸に於ける松林の如きは此の好例たり。

護岸＝津浪の餘り高からざる場処に於いては、津浪を阻止するに足るべき護岸を設くるに、難からざる場合あり、山田、長部等此の好例たり。

防浪地区＝繁華なる街区海岸形式第四或は第五の如き津浪の餘り高からざる海浜にありて、而も多少津浪の侵入を覚悟せざるべからざる場合に於いては防浪地区を設置し、区内に耐浪建築を併立せしむるを可とす、基礎深く且つ堅牢なる鉄筋コンクリート造りは、最良の耐浪建築なるべく之を第一線に配すべし、海岸に直角なる壁を多少強固に築造せば一層効果を収め得べし、又家屋が木造なる場合に於いても基礎を深く堅固に築き土台を基礎に緊結せば相当の効果あり、防浪地区の背面に配

列せしむるに足るべし。

緩衝地区＝津浪の浸入を阻止せんとせば必然の結果として、局部に於ける増水と隣接地区への反射或は氾濫を招来するに至るべし。川の流路渓谷或は其の他の低地を犠牲に供して之を緩衝地区となし以て津浪の自由侵入に放任するに於いては隣接地区の浪害を軽減するに足るべく、若し又投錨の船舶を此の緩衝地区へ流入する津浪に委ねるに於いては、其の被害を多少軽減し得べし、緩衝地区には住宅、学校、役場等を建設せざるものとす、鉄道、大道路も亦之に乗り入れしめざるを可とす。

避難道路＝安全なる高地への避難道路は、何れの町村部落にも必要なるべし。釜石の如き都会地にありては、此の種の道路をして将来の住宅地たるべき高地へ通ずる自動車道路をも兼ねしむるを得策とすべし。

津浪警戒＝津浪予知の困難なるは地震予知の困難なるに等し。

然れども津浪の波及は緩漫にして其の発生より海岸に到達するまでに三陸東海岸に於いては通例少なくも、二十分間の余裕あるを以て器械或は体験によりて其の副現象を観測し、之に依って津浪襲来の接近を察知し得べし。津浪の副現象は左の如し。

㈠　津浪の原因たる海底変動によりて大規模の地震を伴う場合多し。

地震動は之に緩急種々の区別あるも概して大きく揺れ且つ長く継続す。

葛西氏よりの手紙

――この記録を借りた唐丹町漁業協同組合長葛西三郎氏のお礼の手紙

前略

先日は恩師源次郎先生の訃報を聞き、御霊前に御焼香をさせていただきましたが、せめてもう一度元気な御尊顔を拝したかったと思います。

四十年以上も御無沙汰し去年漸く再会したばかりなのに、ゆっくり遠い昔の想い出話を楽しく語り合う機会を約束しながら、ついそれが実現されなかったことをとても残念に思います。

二十年、三十年前のことはそれ程懐かしいと感じないことも、四十年を過ぎると無性に昔が恋しくなるものです。特に源次郎先生の場合はお人柄が温厚であっただけに、忘れることのできない何かを同級生の誰もが意識しているようです。

あの晩お借りした津波の記録、コピーして三部整冊しました。そのうち一部を教育委員会にやろうと思います。

ただ残念なのは前と後が裂けて無くなっており、折角源次郎先生が中心になり、苦労して書かれたものが、その心が充分に後世に伝わらないことを遺憾に思います。

ほんとうに有難う御座いました。どうかお元気で先生の霊を御供養下さいますことをお祈りしま

す。

尚、帰りにお土産品を頂戴しありがとうございました。

昭和四十八年九月三日

敬具

葛西三郎

あとがき

来年の三月三日で、あの忌まわしい昭和八年の三陸津波襲来満五十年になります。また今年の三月は、その犠牲者の五十回忌にあたります。

これに憶いをはせるとき、この津波の被災者の一人としてあらたに恐怖と悲しみが湧いてくる思いがします。あの時四才だった私は父の背におんぶして、海岸の教員住宅から潮引きが始まって間もなく逃げ、小白浜小学校の校庭に避難し、焚火を焚いて暖をとりながら小雪のちらつく中を寒さに震えながら一晩津波のひけるのを待った記憶がよみがえってきます。この記録は十年程前に自宅を整理中見つけたもので、その後いろいろ調べた結果、これは当時父(故源次郎)が小白浜小学校に奉職中、父が中心となり主に当校の教職員が一致協力し、関係諸団体や各位の協力を得て大変苦労してガリ版刷りでまとめたものであることが判りました。この労苦に心から感謝致します。

来年五十回目の津波記念日を迎えるにあたり、私がこの記録を「津波の記録」として製本刊行する意義は一応次の三つです。

一、津波犠牲者の慰霊と心からの追悼を致し、併せてこの貴重な記録を父の霊前に捧げます。

二、この悲惨な津波実録を一人でも多くの人に知ってもらい、またこの尊い記録を長く後世に残したい。

一、二度とこのような大惨害をもたらす津波が絶対に襲来しないことを真に希い、またこの記録のかずかずの教訓

をよく心に銘記し、人々は地震や津波の予知科学を発達させ、津波の被害を未然に防ぎ、いったん大津波が来ても被害を最小限にくいとめることが出来るよう、普段その予防対策に不断の努力をされるよう切望するものであります。

古い津波の記録を編集するにあたっては、原文の送りがなを現行の送りがなに直すのに苦労しましたし、また町村名を現在の市町名に直すのにも面倒しました。なんといっても最初の部分、たぶん津波の前ぶれでもある地震についての記述だと思われますが、この部分が欠落していること、また最後の方の浪災予防法のつづきの部分が欠けていることがかえしがえしも残念ですが、大事な部分は大部分残っていたことはなによりです。この記録は主に唐丹村（唐丹町）の津波記録ですが、次代を担う若い人たちにも読んでもらいたく送りがなを考慮し、古語やむずかしい漢字には若干ルビをつけてあります。いずれ約半世紀も前の文章を原文に忠実に編集しましたから読みにくい点が多々あると思われますがその点はどうか御諒承下さい。尚、文中の拙い挿絵は記憶をたどって私が描いたものですので御笑見の程を。

最後に、お忙しいところを序文を書いて下さいました市教育長吉田正人先生、立派に印刷製本していただいた共和印刷様に衷心より深謝申し上げ、同時に津波犠牲者の御冥福をお祈りしつつペンを置きます。

昭和五十七年八月

佐々木典夫

佐々木典夫
昭和３年 陸前高田市に生まる
昭和23年 中央大学法科卒業
現在 陸前高田市立横田中学校教諭

津波の記録／昭和８年の三陸津波

昭和57年９月１日 発行

編者 佐々木典夫
岩手県陸前高田市竹駒町字大畑15
〒029-22 TEL 01925-5-2476

印刷・製本・発行所 有限会社共和印刷出版企画部
岩手県大船渡市大船渡町野々田8-11
TEL 01922-7-2036

〔非売品〕